令和６年度　第２回小平市総合教育会議　議事録

１　日　時

令和６年１２月９日（月）午前１０時から１１時２２分

２　場　所

小平市役所　５階　５０４会議室

３　出席者

（構成員）小 平 市 長　　小林　洋子

教育委員会

教育長　　青木　由美子

教育長職務代理者　三町　　章

委　員　　望月　克浩

委　員　　吉本　一謙

委　員　　川辺　美沙

（構成員以外の出席者）

有川企画政策部長、白倉教育部長、岡﨑教育指導担当部長、安部地域学習担当部長、奥村政策課長、細村教育総務課長、利光中央図書館長、事務局職員２名

（傍聴者）１名

４　会議内容

午前１０時　開会

（開会宣言）

〇小林市長

おはようございます。

定刻になりましたので、ただいまより、令和６年度第２回小平市総合教育会議を開催いたします。進行につきましては、会議の主催者であります私が務めさせていただきます。

教育長、及び教育委員の皆様には、日頃より小平市の教育行政の推進にあたりまして、ご尽力をいただきまして、改めて感謝を申し上げます。

さて、このたび、１０月１日付けで、新たに川辺委員を教育委員に任命いたしました。今回が初めての総合教育会議となりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、川辺委員より一言ご挨拶をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

〇川辺委員

１０月より小平市教育委員会委員を拝命いたしました、川辺美沙と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

〇小林市長

ありがとうございました。

さて、本年度の第１回の総合教育会議では、「不登校の現状と取組について」、教育委員の皆様

より、様々な観点からのご意見をお聴きし、一人ひとりに寄り添った支援、一人ひとりに合った適切な支援や、児童・生徒の居場所づくりの重要性などについて、再確認をさせていただき、有意義な協議・意見交換をさせていただきました。

（協議事項）

それでは、本日の令和６年度第２回のテーマは、「図書館の将来像について」でございます。

来年、令和７年度は、小平市立図書館開館から５０周年の節目の年を迎えることとなります。

また、小平市においては、現在、令和８年度完成予定の小川駅西口再開発ビルに新たな公共施設を整備しており、小川西町図書館を移転・開館するための準備が進められております。

移転にあたりましては、ＤＸ（デジタルトランスフォーメーション）の視点、滞在環境を充実させる視点を踏まえた整備を検討しているものと認識しております。

いわゆる一般的な本の貸出サービスだけではなく、他の自治体も取り組んでいるような、時代に合った新たなサービスを提供することは重要であると考えております。

私といたしましては特に、図書館の居場所としての機能に魅力を感じており、本を通じて幅広い世代の市民がいつでも気軽に滞在でき、誰もが自分の居場所と感じることができる空間が理想的なものと考えております。

本日は、図書館の将来像について、教育委員の皆様のご意見等を伺いながら協議させていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、始めに事務局から、図書館の将来像について説明をお願いします。

○安部地域学習担当部長

小平市には、８館３分室の１１か所の図書館があり、総勢約１００人の職員及び会計年度任用職員などによって運営されております。

本日のテーマである図書館の将来像について、小平市立図書館の特徴や取組などについて資料をまとめました。

資料１ページをご覧ください。

まず、小平市立図書館の５０年の歴史についてお示しをしております。

小平市における図書館の始まりは、昭和３９年５月、当時仲町にあった中央公民館内に開設された図書室で、その後公民館青年の図書室や福祉会館内の図書室が開設されました。

これらの図書室は規模が小さく、図書館法に基づいた規模の大きい本格的な図書館の開館が期待され、昭和４８年に策定された小平市長期総合計画実施計画の中に図書館の建設が盛り込まれました。これを受けて、昭和５０年５月に現在のなかまちテラスの位置に市内で最初の「小平市立図書館」が開館し、市立図書館５０年の歴史がここから始まりました。

その後、花小金井図書館、小川西町図書館、喜平図書館、上宿図書館が連続して開館し、昭和６０年には中央図書館が開館しました。

その後、津田図書館、大沼図書館が開館し、２ページの地図にありますように、「１５分も歩けば図書館に行くことができる」ことをキャッチフレーズとした現在の図書館ネットワークが出来上がります。

３ページをご覧ください。小平市では各図書館に特徴を持たせた運営を行っております。

中央図書館は、市内の図書館の中心館として様々な機能を担っております。参考図書室やＤＶＤコーナーなどの試聴コーナーもございます。

仲町図書館は、昭和６０年の中央図書館の開館に伴い、名称を小平市図書館から仲町図書館に

変更しました。その後、平成２７年になかまちテラスとしてリニューアルしております。詳細は後ほど説明いたします。

花小金井図書館は、平成１８年に現在地に移転開館しました。花小金井図書館が入っている東部市民センターは、東部出張所と集会室、図書館の複合施設で、図書館は建物の２階と３階にあります。

近年は周辺人口の増加と駅前の利用しやすい立地条件により、中央図書館に迫る利用があり、混雑への対応が課題となっております。

小川西町図書館は、ハンディキャップサービスの中心館として、図書館の利用に障がいのある利用者に対するデイジー図書等の貸出に力を入れております。令和８年度には小川駅西口新公共施設に移転する予定です。

喜平図書館は、郷土写真資料の収集保存事業を昭和５６年度から実施しており、昭和初期からのテーマ別写真などを保存しております。これらは学校の周年記念誌や市内施設における展示などに利用されております。また、小・中学校用教科書を展示し、貸出・閲覧を行っております。

上宿図書館は、小平市の西端に位置し、自然環境に恵まれ、地域の方が気軽に利用できる地区図書館です。平成１６年度から小平市に関する新聞記事を切り抜いて、整理・保存しております。記事索引の作成も併せて行い、ホームページ上の新聞記事検索データベースで公開しております。

津田図書館は、都営アパート地内に公民館とともに開館しました。近くには、せせらぎのある緑豊かな玉川上水があり、自然に恵まれた環境の中で、地域の方が気軽に利用できる図書館です。開館以来ポスター収集分担館として、ポスター等の収集、展示を行っております。

大沼図書館も、都営アパート地内に公民館とともに開館し、小平市に在住している方々の著作物を収集し、利用に供しております。

次に４ページをご覧ください。

小平市の図書館では、開館以来、通常の図書の貸出やおはなし会といったサービスの他に、他市の図書館ではあまりみられない、特徴的な事業にも取り組んでおります。ここでは主に四つの特徴的な事業について紹介いたします。

一つ目は、「古文書の収集・整理」です。

昭和５０年の図書館開館時から、古文書の収集や整理に取り組んでおります。目録を作成するとともに、古文書によって明らかになった歴史の解説を載せて、市民が地域の歴史への関心を深めるきっかけとしております。

二つ目は「地域資料の収集・整理」です。

市民の郷土理解を深めるために、地域を知るための様々な資料や情報を収集し、令和５年度末までに、地図や行政資料、古文書、郷土写真、地域のポスター・広告・チラシ・小平市関連の新聞記事などの貴重な地域資料を、約４３万点収集しております。

三つ目は「特定歴史公文書」です。

小平市では、令和４年１０月に「小平市公文書等の管理に関する条例」が施行されたことに伴い、公文書館機能を併設しております。行政文書のうち、保存期間が満了した歴史的に貴重な文書の移管を受け、特定歴史公文書として永久保存するとともに、一般の利用に供しております。

四つ目は「学校との連携」です。

小平市では、全小・中学校に学校司書を配置し、学校図書館の運営を支援しております。また、仲町図書館に配置されている学校図書館相談員が、学校図書館運営に関わる総合的な相談と業務支援のため、定期的に各学校を巡回しております。

次に５ページをご覧ください。

小平市の図書館では、４ページでご紹介したこれまでの古文書や地域資料などの蓄積をもとに、平成３０年度から「こだいらデジタルアーカイブ」を構築してきました。

現在、「こだいらデジタルアーカイブ」には、小平市史、郷土写真、平櫛田中関連資料、新聞記事検索データベース、定点撮影写真の資料が掲載されており、小平市立図書館のホームページのリンクから、誰でも閲覧することができます。

開館以来築き上げてきた図書館のコレクションがあったからこそ、全国的にも注目されるデジタルアーカイブの構築ができたものと捉えております。

６ページと７ページをご覧ください。

平成２７年３月には、仲町図書館が、公民館と図書館の機能を一体化した生涯学習施設、「なかまちテラス」としてリニューアル開館しました。なかまちテラスは建築界の「ノーベル賞」ともいわれている「プリツカー賞」を受賞された妹島和世氏により設計された建物です。

なかまちテラスは、従来の公民館・図書館機能を超えて、地域の学びとつながりづくりの拠点となることで、生涯学習の振興や地域の活性化を目的としております。地域にとってより魅力的な施設にしていくため、「なかまちテラスＬｉＮＫＳ」を立ち上げ、市民参加により職員と一緒に事業などを企画・運営しています。

なかまちテラスの新しい取組として、ＩＣタグや自動貸出機、盗難防止ゲート、Ｗｉ－Ｆｉや貸出ロッカー、それまでの小平市の図書館にはなかったカフェを併設するなど、先進的な取組をいくつも取り入れているのが特徴です。

８ページと９ページをご覧ください。

小川西町図書館は、小川駅西口新公共施設に移転を予定しており、こちらに記載した３つのコンセプトを掲げて、現在開館に向けた準備を行っております。

なかまちテラスでも取り入れた、新しい技術やサービスを更に発展させ、これからの時代の図書館のキーワードになるであろうＤＸや居場所に関する取組を検討してまいります。

１０ページをご覧ください。

将来、電子化が進んだ図書館では、物理的、バリアフリー的にメリットが考えられ、また、様々な利用場面が想定をされます。

最後に１１ページでございます。

参考までに、他市の新しい図書館として多摩市と府中市の図書館の特徴について記載をしております。

説明は以上でございます。

○小林市長

それでは皆様からご意見を伺いたいと思います。まずは三町教育長職務代理者よりお願いいたします。

○三町教育長職務代理者

このような機会をいただいて、改めて、図書館の事業・取組を再認識させていただきました。事務局からの資料を見ると、よくやっていると感じております。そういう意味では感謝したいと思っております。

いただいたテーマが図書館の将来像という大変大きなテーマのため、自分としても少し捉えどころがありませんでしたので、自分なりの小平市の図書館に期待したいことということで考えていきたいと思います。その上で今ありましたように、小平市の図書館の現状を確認する必要があ

ると思っていましたが、本当に事務局で大変素晴らしい資料をまとめていただき、将来のことも内容に入っており、改めて勉強になったと思っております。

改めて図書館法を確認してみると、第２条に「図書、記録その他必要な資料」とあり、「その他必要な資料」というのはデジタルコンテンツも含めてのようですが、そのようなものを整理、保存、そして、普通の言い方にすると、一般に公開、提供するというのが、図書館の定義になっていると理解しました。第３条で私がはっと思ったのが「図書館奉仕」という言葉で、やはり一般には市民へ奉仕するという立場なのだろうと。その中身が留意点としていくつか入っていると理解をしました。

市民サービスという姿勢の中で、実際に事務局でまとめた資料を改めて確認しますと、各図書館の特徴、特徴的な事業、あるいはそれからの発展などは、図書館法第３条のところで、例えば、郷土資料、地方行政資料、美術品、レコード、フィルム、そういうものの収集にも留意しなさいと書かれており、こういうことを全て根拠にしながら進められていると理解したところです。もちろんこれはどの自治体も図書館法に基づいてやられているのだと思いますが、自分の肌感覚でいうと、やはり本市の図書館関係の皆様の意識が高いのではないか、どの分野についても一生懸命、積極的に進められてきていると感じています。

この間の教育委員会定例会でも質問したところ、例えば、学校で郷土学習に使えるようなデジタルコンテンツを開発したいという話も事務局からあったと思いますし、そういった常に先取りをしていこうという印象を感じます。

さらに、この資料にもありますように、やはりこれからは、一層デジタル化、あるいはネットワーク化されていくという時代の中で、この電子図書館というものは今後、当然進んでいくと思いますし、進めていただきたいと思っております。もっと利便性も高まるのではないかということと同時に、図書館のイメージが変わってくるのではないかと捉えています。つまり、図書館は本があるから図書館なのでしょうけれども、場合によっては、本がほとんどない部分も図書館になるのではないかと、そんなイメージが自分にはあります。

そこで、これからのということにも繋がるのですが、市長がおっしゃった居場所ということについては、実は以前の総合教育会議でも図書館について扱ったことがあり、本に囲まれた居心地の良い空間を提供してほしいということを、前市長のときの平成２９年と令和２年の総合教育会議で図書館に関わって話したときに、図書館に期待したいということで話をしています。

自分のイメージは中央図書館、なかまちテラス、あるいは津田図書館ですが、特に中央図書館のイメージでは、本を借りに来るための空間ではなく、居心地よく使われている方もいらっしゃいます。結構高齢者が多いですが。特に目的がなくても寄ってみようという空間を提供するのが図書館で、そこに本があることで生かせると以前から思っていました。

たまたま昨年、北海道の旭川市の隣町で東川町に行く機会があって、そこに「せんとぴゅあ」という複合施設があり、大きな建物の中央の図書のコーナーは、書棚の高さも４段ぐらいで、全部を見渡せるようなつくりでした。図書館という名前はなく、「ほんの森」という名前を使っていました。その周りにくつろげるスペースがあったり、町の特産品である木工家具、椅子、テーブルなどが置いてあって、そこでくつろぐことができます。近くに大雪山がありますから、大雪山関係の色々な資料があったり、多目的室、ワークショップの活動場所であったり、オリジナル商品のショップがありました。寄って過ごせる場所に本がある、そういうイメージです。図書館機能を持っていることで、町民の活動を支えるような、何かを生み出すような場所になるということで、とにかく感動しました。これまで自分が持っている、これからの図書館の一つの姿かなと感じたので、そういった本に囲まれた居心地の良い空間というものを提供してほしいと思いまし

た。
　もう一点は、どの世代の人も集って過ごせる空間を提供してほしい、そんなことを思っています。
　以前、佐賀県の武雄市の図書館に伺ったときには、蔦屋が運営を行い、ビデオも借りられるし本も借りられて、中に喫茶コーナーもあったと思うのですが、そこでコーヒーも飲める、まさにそういうコンセプトだったと思いますし、小平市の現役引退世代に当たると思われる人が雑誌などを静かに読んでいます。データを見ても、小学生ごろまでは結構図書館を利用していて、津田図書館は前に公園があり、そこで遊んでいて図書館にちょっと寄るといったことは小学生ぐらいまではあるのですが、それ以降の世代ではあまり利用されてないのではという印象はあります。
　ＮＨＫの「プロフェッショナル」という番組があります。たまたま録画していたのですが、７月に放映されたもので、建築家で、馬場正尊さんという方に焦点をあてた番組だったのですが、天童市立の図書館の建て替えをしない代わりに、４１年経っているので、作り変える意味でのリノベーションをしようということで提案を受けて、活動している姿です。色々な方に話を聞いている中で、例えば図書館職員からは、若者や中高年の利用者を伸ばしたいという意見がありました。それから、読み聞かせの活動をしている方からの意見として、音楽を入れられるともっといいのだけれど、図書館は音が出せないので、それができないかという声がありました。色々な声を聞きながら、その方が設計したコンセプトが、「人とまちと時をつなぐ　わたしの図書館」で、市長に提案しているわけです。
　つまり、静かに過ごしたい人もいられる空間や、買い物帰りにちょっと寄ってコーヒーでも飲みながらくつろげる空間も提供する、また中高生には友達と少し話しながら勉強する環境も与えられる、それをできるだけ設計の中に考えようとしている姿がありました。やはり本をというより、そこに寄って過ごす中でという、誰もが集まる空間が大事で、全世代の人が集えるということがいいのかなと、そんなことを考えました。
　最後にまとめですが、２、３日前にテレビで綾瀬はるかさんが、図書館だと思うのですが、そこで高い本棚の書架の中で本を読んでいる姿がありました。図書館はあんなに本で囲まれる時代ではないという考えなので、そういう姿は私は嫌いなのですが、場面が変わると、松下洸平さんという俳優が大きなガラス張りの窓に向かってゆったりとくつろいでいる姿がありました。ある図書館の一つの映像なのですが、後者のようだったらいいなという感じで、何のコマーシャルかと思ったらユニクロでした。私の図書館のイメージは、ゆったりした居心地のいい空間ということで、これからの図書館に期待したいです。映像的な話を全体的にさせていただき、具体的でなく申し訳ありません。

○小林市長
　一つだけお聞きしたいのですが、北海道の東川町の「せんとぴゅあ」というのは、貸出も行っているのでしょうか。

○三町教育長職務代理者
　はい、そうです。

○小林市長
　図書館としての機能はあるが、図書館という名前ではなく、「ほんの森」だということでしょうか。

○三町教育長職務代理者
はい。図書館というイメージで、貸し出す本がずらっとあるというよりは、色々な本が中心に広くあり、脇に色々なブースがあります。その中の一つのコーナーで貸出の受付コーナーがある、そういうイメージです。

○小林市長
やはりコンセプトは、本に親しんでもらうというところが一番大事なのかなと思っていて、図書館に行き慣れている子と、行かなくなってしまう子と、割と両極端になりつつあるのかなと思っています。そういうところの中では、このような交流施設の中に図書館があって、何かのついでに寄れるよねというところは一ついいのかなと思ったところです。
あとは、今日は視覚的な部分で捉えていただいたというところなので、すごくイメージが湧きました。最後のお話がイメージ湧きやすかったなと思います。
ちょうどたまたま昨日の会合でお話しした方で、「市長さんね、小川西町で新しい図書館に移転するみたいだけど、俺は本を静かに読みたいんだ」と力説をされて、賑わいの中に図書館があることは許せないと怒られてしまったのですが、さっき三町委員がおっしゃったように、「そういうスペースもある、本を静かに読めるスペースもある、でも何かワイワイしながら本に囲まれているスペースもあるという、そういう捉えです」と言ったのですが、その方は静かな図書館に対する熱い思いをお持ちだった感じでした。

○三町教育長職務代理者
私も中央図書館に寄ってみたのですが、やはり一言もしゃべらないでいるべきという雰囲気でしたが、そういう時代ではないのではないかとすごく感じます。中央公民館と完全に中で繋がって、コーヒーを飲んだりするソファもあったりして、もう少しフリーになれば、図書館のイメージが変わってきて、ちょっと寄りたいと思うのではないかと、中央図書館と中央公民館を見ながらも感じています。

○小林市長
その方はかなりご高齢な方だったのですが、図書館の持つイメージというものはどんどん変わってきていると思います。ですので、おっしゃっていただいたような居心地の良い空間、立ち寄りたくなるようなところは、目指していきたいと思っております。ありがとうございました。
それでは、続きまして望月委員、よろしくお願いいたします。

○望月委員
それでは改めまして、本当にこのような機会をいただきましてありがとうございます。恥ずかしながら、この年代になってから、こどもが大きくなって、私も段々と図書館に行く機会が減ってきてしまったと思っています。改めて図書館というものが今後どうあるべきなのかということを考えさせていただける、いい機会になったと思います。
色々と調べていく中で、おそらく人口の割合からすると小平市は非常に図書館の数が多いという特徴があると思いました。先ほどの話で、徒歩１５分圏内に図書館があり、平成１８年からは学校司書が配置され、図書館、学校の繋がりができ、小学校、中学校に必ず学校司書がいるということが、小平市の特徴になっていることを改めて確認させていただきました。また、どこの小

学校、中学校に行っても、図書室は飾り付けをしてあったり、児童・生徒が興味を感じることができるように、色々な工夫をされていると改めて感じました。

図書館自体も、児童や生徒たちが通いやすいような工夫をしてきているので、小学生の利用頻度がとても多いと感じておりました。

また、最近の話では、ＧＩＧＡスクール構想によって、小学校、中学校においてタブレットの利用がだいぶ増えてきて、デジタル化に関して慣れ親しんだ状況になっていると思います。

コロナのときから比べますと、図書館の利用頻度は、全体としては上がってきてはいるのですが、令和４年、５年のところで見ますと、実は少し貸出数自体が減っています。実際にどのような方が利用しているのか拝見させていただいたところ、小学生までは利用頻度がものすごく高く、登録利用者数も５割を超えるような、高い利用頻度なのですが、中学生から４０歳ぐらいまでは、登録者利用率が１５％ということでかなり減少してしまいます。小学校のときは図書館に慣れ親しんでいることが多いので結構利用しますが、そこから離れてしまうと、なかなか利用する機会がなくなってしまっているというのが現状かと思います。

デジタル化も進んできて、大人が、我々もそうですが、公務や何かで調べ物をしたいときに、図書館に行く場合であっても、残念ながらＡｍａｚｏｎなどで本を買ってしまったりします。中古の本も流通していることもあり、そういうところで手に入れることができてしまうと、図書館に行く機会がなくなってしまうということが、懸念事項になるかと思います。

ただ、流れ自体を変えていけるかと言われますと、便利になってきている分、難しいのかなと思います。そういう中で、図書館の在り方を考えていく必要があると感じております。

また、「こだいらデジタルアーカイブ」の構築について、私はこの保存をしていくという意味ではすごく便利ですし、いいものだと感じております。このような資料は、図書館でも、どこに行っても見ることができるような、例えば今はタブレットなどを持っている方も多いので、図書館に行ったら、自分自身のタブレットで見ることができるような、そういったサービスがもっともっと発展していくことを期待したいと思っております

今後の図書館というと、今までは、勉強するとか、ちょっと調べ物をする、本を読む、そういった場としての役割があったと思います。一方、最近は、先ほどご紹介がありました、多摩市の中央図書館や府中市の中央図書館などは、滞留ができて、少し会話ができるスペースを設けています。小平市では、読み聞かせなども色々なところで行われていると思います。小さいこどもたちや、年齢をある程度重ねている方に対する場所としては認知もされ、使用されているというのが今の小平市の図書館の状況で、その中間層の利用はあまりない状況かと思います。

そういう方々がどこにいるのかと思ったときに、すぐ近くにスターバックスがあるのですが、そこは比較的、若い方がゆっくりコーヒーを飲みながら、勉強であったり雑誌を読んだりしながら、それぞれの過ごし方をしています。そこのテーマはいわゆるサードプレイスということなのですが、第３の居場所を提供しているというのがサービスとしてあるのですが、小平市の図書館も、先ほど三町委員からもありましたが、勉強などのスペースが使われている、カフェは休みだったけれどもそこの部分が使われているなど、そういう場があってもいいのではないかと思います。

少し幅を広げまして色々な図書館を調べてみました。フィンランドのヘルシンキの中央図書館で「Ｏｏｄｉ」というところがありますが、ここは２０１９年、国際図書館連盟が決める「Ｐｕｂｌｉｃ Ｌｉｂｒａｒｙ ｏｆ ｔｈｅ Ｙｅａｒ」で、世界で１位に選ばれた図書館だそうです。ここはコンセプトが、「人々が交流するリビングルームであり、すべての人々に開かれた文化の発信地」となっており、かなり大きいところなので、同じような形は難しいと思うのですが、１階

はカフェで、ちょっとしたものを食べることができたり、コーヒーを飲めるスペースがあります。
上の階には、一般的な図書室と、交流するスペースとして非常に広くて何もないゆったり過ごせるような場所があって、その更に上には、これは面白いと思ったのですが、文化に少し触れることができるように、新しく、誰もが使える３Ｄプリンターが置いてあります。そういった体験ができるものが置いてある中ですごく面白くていいと思ったのが、ｅスポーツの促進ということで、実際にゲーム機なども置いてあるそうです。これはコミュニティであったり、使い方は色々あると思うのですが、ゲームルームも設置してあり、人々が交流できるようになっているということと、地域の方が作ったものやデザイナーの方が実際にそこで作った商品を展示してあったり、そこから自分のいるところの文化などを発信できるなど、そこに滞在し、または行くことによって色々なものに触れることができる。そういう場として使われているということです。
全てが同じようにというのは、もちろん難しいことだと思うのですが、私はこのいわゆる居場所であったり、そこに行って何かを得ることができる場は、コミュニティとしてもそうですが、人が集まってくる良い場所になるのではないかと考えております。ぜひそのようなコンセプトを今後ご検討いただき、小川駅西口に今度新しくできるところもそうですが、昭和５０年から図書館ができ続けていることを考えると、同じ時期に老朽化し、改めてコンセプトを考えていただく時期が出てくると思います。そういったときに、ぜひそういう文化の発信であったり、文化の交流であったりを体験できるような、そのような図書館、利用サービスであればありがたいと思います。
少し取り留めもないようなお話になりましたけれども、私からは以上でございます。

○小林市長
一番初めにこどもが大きくなってきて行かなくなったとおっしゃっていましたが、ご自身でなぜ行かなくなったと思われますか。

○望月委員
こどもが小さいときは、こどもを連れて一緒に、家で使う読み聞かせの児童本を借りたり、元々それがメインで私は行っていたのですが、それがなくなってきたら、先ほどの話ではないですが、自分のことになるとそこに行く必要性がないわけです。
また、先ほど言ったように、調べものなどがあっても、今は残念ながらインターネットなどで全部できてしまうのと、本当に専門的なものであれば図書館という話になると思うのですが、そこまででなければ、いわゆる参考書という場合には、先ほど言ったＡｍａｚｏｎで済んでしまうことがほとんどだろうと思いますので、それによって利用頻度が減ったというのが正直なところです。

○小林市長
確かにこどもに読み聞かせするときは、色々な本、バリエーションなどが欲しいので、割と図書館は使いやすい、便利に使えると思います。あとは、絵本は割と普遍的なもので新しいものを追いかけなくても、逆に古いものの方がずっと長く、昔からある絵本の方が価値があるというか、こどもにぜひ読んでほしいなという本がいっぱいあるとも言えるのかなと思います。翻って自分の方で調べものとなると新しい知識でいうと、最新の本が必要になると、図書館になると少し「あれっ？」というときはあるのかなということには少し共感したところでございます。
望月委員のご発言の中で一番共感したのが、体験ができるスペースという切り口をいただきま

した。今までの図書館だとやはりそこはなかったと思います。調べ物や勉強とか、本を読むということに対しての居場所というところは今までもありましたが、体験というその切り口は今ちょっと足りてないとか、あまりなかった感じかなと思いました。フィンランドのことも調べていただいていて、３Ｄプリンターはちょっと難しいかもしれませんが、ｅスポーツも少し面白いかもしれません。中高生が来るきっかけにはなるかなと思いました。ありがとうございました。

では、続きまして吉本委員、よろしくお願いいたします。

○吉本委員

小林市長にこのような機会をいただき、ありがとうございます。また事務局の皆さん、分かりやすい資料を作っていただきありがとうございます。図書館の将来像についてということで、私も三町委員と同様に、今、将来を含めて、図書館に期待したいことをメインに、お話しさせていただきたいと思います。

まず小平市の図書館が、老若男女の方々が居場所と感じる、これは市長もおっしゃっていましたが、それに加えて、利用したい、利用できると思う図書館になってほしいと感じています。その上で、こちらの資料にもありましたが、居場所ということと、ＤＸは将来像のキーワードになると考えています。

居場所という点では、１５分歩けば図書館や分室が整備されている、というのはとても素晴らしいことだと思いますし、先ほどご説明がありましたが、それぞれ特徴がある図書館や分室で、とても魅力的だと感じました。なかまちテラスにはカフェがあったり、今後、小川西町図書館ではキッズスペース、カフェ、音楽スタジオといった滞在型の図書館としてのサービスを行うとのことで、とても期待しています。

もう１点、今、望月委員がおっしゃった、体験できるということは、お話をお聞きして、すごく魅力的だと感じました。ＤＸという点では、自動貸出機や自動返却機、また電子図書館なども魅力的だと感じました。

居場所や賑わいに期待する一方で、図書館に行くことが難しかったり、時間がないといった方にとっては、ＤＸの取組はとても便利だと思いますし、それであれば利用したい、利用できる、といった方も増えると思います。来館できなくても、図書館と繋がることで居場所と感じることができるようになると思っていますので、この２点を大事に継続して推進していただきたいと思います。

また、更に期待したいところでは、今でも図書館は素晴らしい活動やイベントを行ってくれています。まずその存在を皆さんに知ってほしいと思っています。例えば、こども読書活動の推進として、３～４か月児健康診査時に絵本を手渡すブックスタートや、４歳から小学生を対象としたおはなし会も行っています。私自身も７歳と５歳のこどもがおり、本と触れ合ってほしいと思っていますが、情報を知らないと参加できないと感じているところもあります。

以前、教育委員会定例会でもお話しさせていただいたのですが、図書館のホームページは市から独立していて、図書館目線で作成ができていて、分かりやすいです。見ていただいたら分かると思いますが、ランキングや資料の検索、その日の全館の開館時間なども一目でわかるようになっていて、本当に分かりやすいです。そのような事業の情報を、図書館のホームページを始めとして、小平市のほうでも広報や周知活動に協力していただき、小平市の図書館の魅力をたくさんの方々に知ってもらい、来館し、居場所として、利用したいと思える、そのような図書館に感じてもらえるようになることに期待したいと思っています。以上です。

○小林市長
　吉本委員自身は、最近は図書館に行かれていますか。

○吉本委員
　私も残念ながら最近は利用していませんが、妻がこどもと一緒に行って本を借りてきて、図書館の本が家にあるという状況はあります。

○小林市長
　来館できなくても図書館と繋がれるということがＤＸで行う上でいいのではないかと言っていただきました。デジタル化することが目的ではなくて、デジタル化した後にどうなっていくかというところがないと、デジタルだけに終始してしまうと、無味乾燥、機械が何でもやってくれるよね、みたいな社会になってしまうので、やはりそこの先に何があるかというのをイメージするのが大事かなと思っています。吉本委員がおっしゃっていただいた繋がりというところで、今は様々な理由で図書館に行けないけれども、これがあることで繋がれるよね、というような図書館でと言ってもらえるといいのかなと思いました。
　あとは、小さいときからおはなし会とか、そういうところに行くとしたらどうでしょうか、お子さんはおはなし会に参加されましたか。

○吉本委員
　おはなし会、イベントに参加したことはあります。すごく楽しく、それが家族の会話にもなっており、とてもありがたい存在だと感じています。

○小林市長
　行けば次のおはなし会とかチラシとかもあったりするのですが、それをまず届けるのが、最初に来ていただくまでが割と難しいと思っていますが、情報はどのようにしたら市民の皆さんに届くでしょうか。

○吉本委員
　図書館のチラシ・ポスターを見て来館される方が一番多いというアンケートを拝見しました。他は家族や知人から聞いたというのが多いので、今市長がおっしゃった、どのように来ていただくかというところでは、市のホームページや市報を見てという方々が、図書館のチラシやポスターを見てという方々より少ないので、そこで取り扱っていただく場面を増やすということと、今はＳＮＳだったり、Ｘだったり、インスタグラムなど色々な媒体があると思いますので、そのようなところでも、周知していただけたらと感じています。

○小林市長
　口コミは大事ですよね。このご時世どうしてもＳＮＳからの発信というところはやっていかないといけないし、なかなかどうしても市側からとか図書館側からとかの発信になると固くなりがちなので、少しバズる感じの、ＳＮＳ広報もこの先は必要なのかなと改めて思ったところです。ありがとうございました。
　それでは続きまして川辺委員、よろしくお願いいたします。

○川辺委員

よろしくお願いいたします。このような機会をいただきまして市長と事務局の皆様には本当にありがとうございます。

私も普段図書館を使わない層だと思いますが、教育委員になって初めてこの資料をいただいて、「小平市の図書館すごくない？」と思いました。この資料を読んで、ホームページも見てみようとなったのですが、私はきっと教育委員にならなければ、このことを知りませんでした。普段図書館に通われている方は、もちろん図書館の良さを知っているから通われていると思いますが、図書館を活気づけるためにということをまず３点と、それから居場所としての図書館の利用という意味で、私の方からご提案というか、「こんな図書館だったらいいな」というようなお話をさせていただきたいと思っております。

まずは、私のように普段図書館に行かない層の獲得というのがすごく重要になってくるのではないかと思います。まず、私自身がこれをぜひ広めたいと思いました。もっとみんなが知っていたらいいと思いますし、私の息子は大学４年生、高校３年生ですが、こんなに素晴らしい図書館が市内にあるということを全く知らないのです。

デジタル時代ということで、先ほども望月委員もおっしゃっていましたが、私も自分のものはやはりインターネットなどで買ったり読んだりするのですが、きっとデジタルでは得られない良さが図書館にあるのではないかと思いました。これは吉本委員もおっしゃっていたことと同じですが、小平市の図書館のホームページはすごいですが、ホームページを開くところに至るまでに、１０代、２０代の方、私もそうですが、ＳＮＳを普段頻繁に使っている層は、まずスマホを開いて、大体インスタグラム、Ｘを見ます。ですから、まずそれを活用して、この各館の特徴を、各館がそれぞれのインスタグラムやＸを開設して、「うちの図書館はこんな特徴があります。」と写真付きで、若い世代や、普段図書館に行かない層へ、分かりやすいアピールが必要なのではないかと思いました。まずＳＮＳを開いて、各館のアピールが出てきて「ちょっと面白そうだな、行ってみようかな、ホームページを見てみようかな」に繋げられたら、その良さは伝わるのではないかと思います。本当に私ちょっと感動しました。この資料をいただいて、すごいなと。図書館がなぜこんなにあるのだろうと思ったのですが、それぞれに特徴があって素晴らしいと思いました。時間がなくて、なかなか伺えないこともあるのですが、時間があったらこの図書館に行ってみたいという気持ちが生まれました。これがたくさんの方に伝わればいいと思います。

二つ目は、地域のニーズに合わせたコンテンツを提供してはいかがかというところです。例えば、小平市であれば農産物や名産品がたくさんあるので、そういったものを販売するとか、アンテナショップみたいなものを併設、併設が難しければイベント展示でもいいですが、「普段図書館に行かないけれど、ちょっと野菜を売っているらしいから買いに行こうかな」など、そういったものも面白いと思いました。

三つ目は、パートナーシップです。小平市は学校も企業も、商店もたくさんありますので、それらとの連携はいかがでしょうか。まず図書館利用と地域振興をセットにして、市内企業のイベントスペースとしての活用、そこには自衛隊だったり、企業ではない官公庁も含めますが、例えば、お祭り等でも自衛官募集をやっていたりしますので、企業の宣伝ではないですが、そういったイベントスペースとしての活用、「こういう体験会があるよ」というようなものが図書館でやっているというのはいいのではないかと思います。

それから本以外のイベントで、例えば、世田谷区立図書館では、図書館コンサートというものをやっているそうです。私は音楽をやっていますので、ここにとても興味を持ったのですが、図書館に行って音楽を聴ける日があるということは、普段本は読まないけれど音楽を聴いてみよう

という方の集客にもつながりますし、音楽を聴きながら本を読めるというのも面白いと思いました。

次に、図書館で地元商店街と連携してクーポン券等を配布したらどうか、ということです。例えば、図書館の近くに商店街があって、図書館を利用したら、お店のクーポン券を渡す。もちろんお店との準備が必要になってくるのですが、商店街にいいところがある、図書館の帰りに買い物に行ったらいいことがある、ということであれば、図書館に来た人はお店に買いに行こうと思うし、お店には図書館に行った人が来てくれるので、いいと思いました。

また、学校との連携をすごく考えました。私の息子が不登校だったということもあるのですが、例えば「学校には行けないけれど、昼間の居場所が欲しい」とか、「勉強はしたい」といったこどもに対して、学校にはそれぞれ専門員の方がいて、不登校の子も、教室には入れないけど、このクラスなら行けるなど、それぞれの学校で工夫されているのが、この３か月でよく分かり、素晴らしいと思ったのですが、それでもやはり学校に足が向かない子はいます。そういう子も、例えば図書館なら行ける、そういう居場所の一つになったらいいと思います。昼間にふらっと行っても、それを見守ってくれる大人を配置して、居場所を求めているお子さんや、放課後も同じですが、そういうお子さんがふらっと来られるような場所であれば、例えば、夜遅くまで毎日いるお子さんがいたら、「あの子おうち大丈夫かな」と心配する、気にかけてあげることもできると思いました。

そこから関連して、私も市長がおっしゃったのと同じように、居場所としての図書館の活用がすごく重要になってくると思います。それで色々と他市のことを調べて、資料に載っている多摩市立中央図書館と府中市立中央図書館にそれぞれ実際に見学に行ってみました。まず多摩市は、先ほど市長がおっしゃっていたように、静かなところで本を読みたいという方もいらっしゃるということで、静寂読書室というのがありました。ここの部屋に行けば、周りが少しワイワイしていても静かに読むことができ、これはすごいと思ったので、それだけ加えさせていただきます。

あとは、資料にはなかったのですが、居場所として機能している図書館が近くにないか調べたら、私の生まれ故郷の西多摩郡瑞穂町の瑞穂町図書館が２０２２年３月にリニューアルオープンし、「日常の居場所となる」をテーマにしている図書館だったのです。私もこどもの頃何度も利用した図書館で、今回実際に行ったのですが、外から見ても変わっていません。「なんだ、変わっていない」と思ったのですが、中に入ってびっくりしました。１９７３年に建築しているので、もちろん古いですが、中がもう本当にすごく綺麗になっていて、２０２３年にグッドデザイン賞を獲得したということでした。ソフト面、ハード面両方によるリニューアルということで、どういう図書館を作りたいか、ワークショップを開いて聞き取りをしたそうです。その中で「ＭＩＤＯＲＩ」という図書館ファンクラブができたそうです。そのファンクラブが「瑞穂町図書館を日本一の図書館にする」と色々と発信をしているということで、すごいなと思いました。

まずこの図書館のハード面ですが、様々な市民活動を受け入れる自由で寛容な公共空間が必要、という考えのもとで本や家具を配置しており、会話や飲食ができる図書館で禁止事項がないのです。びっくりしたのが、「これをしないでください、あれはしないでください」という禁止事項は書いておらず、「誰もが利用しやすい場所であるために　私ができることってなんだろう」、「みんなも快適に過ごすために あなたができることは何ですか」という、その二つのポップだけが半個室になっているところに置いてありました。そして一番びっくりしたのが、中学生、高校生、小学生がすごく多かったことです。日曜日に行ったのですが、駐車場が停められないほど混んでいて、リニューアルしてから３年近く経つのに、こんなに人が来ているのかと驚きました。２階に行ったら、無料のドリンクを飲めるお茶や水のサーバーがあり、その横に自動販売機もあって飲

食ができます。

そういったことをどのようにアピールしているかというと、すぐ近くに瑞穂農芸高等学校があり、そこの高校生が図書館周りの花壇に花を植えています。高校生は、自分たちの植えたお花がそこで見られるのです。お花は季節によって植え替えられています。また、テラスからは、隣接する瑞穂中学校のグラウンドが一望できます。ティーンズスペースもありますし、山側にあるので紅葉が見えるロケーションを生かしていたりと、地元の学生も利用しやすい工夫が随所に施されていました。

もちろん小さなお子さまと親御さんたちもいらっしゃるし、本を借りに来られる普通の図書館としての利用の方もたくさんいますが、中学生、高校生のグループが本当にたくさんいて、本を読んでいないのです。本を読んでいる子ももちろんいますが、自習をしている子も、グループでお話ししながら相談している子もおり、ほかにも少し伺った中では、寝ている方や編み物をしに来る方もいるということでした。これは成功例ではないかと思っています。人が集まる、図書館の未来をすごくそこで感じました。全く同じにというわけではないのですが、とても参考になったので、例として一つ挙げさせていただきました。

ハード面でまとめますと、改修するときなどは、ぜひワークショップを開いて、市民の方に、どんな図書館が欲しいか、もちろんやっていらっしゃるとは思いますが、聞いていただきたいです。多様な人が、本を読みたい人も、学校に行けない子も行くことができる、高齢者の方も気軽に来られる、そんな雰囲気があれば、あたたかい内装であればいいな、などと思います。

そしてソフトの方では、様々な目的で人が集まる場所になると、人材の配置はもちろん、本を管理する方だけではなくて、先ほど申し上げたように見守りの方などがいたらいいのかなと思いました。

インターネットで済む時代だからこそ、図書館の在り方を考えてみたのですが、待っているだけではなく、私たちや図書館自身、良さを知っている立場の人からの発信がこれから必要になってくるのではないかと思いました。まず私も実際にＳＮＳなどを使って、小平市の図書館にはこんなにいいところがあるとアピールしていきたいと思っております。以上になります。どうもありがとうございました。

○小林市長

具体的なご提案をいただいたところでございます。少し思ったのがその不登校の居場所になるといいなとおっしゃっていた中で、ただ居場所だよねというのではなくて人がいてということでしょうか。

○川辺委員

はい、そうです。

○小林市長

「見守ってくれる人がいるんだよ、だから来てね」みたいなところだからこそ居場所になるというのは、なるほどなと思いました。９月１日にどこの図書館だったか、学校に行きたくなかったらちょっと図書館においでみたいな広告が確か載っていたような気がします。「居場所として図書館というところが選択肢としてあるんだよ」という発信をする図書館もあるのですが、それにプラス人ということですよね。

○川辺委員

そうですね、顔見知りではないですけれど、あの人がいてくれると思ったら行けるというような、何かがあればいいと思いました。

○小林市長

最初に三町委員もおっしゃっていましたが、図書館では高い本棚に囲まれているのが今の図書館ではなくなってきたというふうな話の中で、やはりどんどんリニューアルしたりリノベーションをしている他市の例を見ると、居場所というコンセプトを持って図書館をどうしていくかというところに切り替えていかないといけないのかなと思ったところです。

また、公共施設がどうしても公共施設マネジメントでもう減っていくのは、ここは仕方がないという中で、図書館の本だけのスペースではなくて、そのプラスアルファの何かを作っていくというところが、やはり、居場所の切り口かなと改めて思ったところでございます。色々と他市の情報も調べていただいてありがとうございました。

それでは続きまして青木教育長、よろしくお願いいたします。

○青木教育長

小林市長には、第２回小平市総合教育会議を開催していただきまして、今回は、小平市図書館に焦点をあててということで、市長と教育委員会とで協議・意見交換を行うことができ、誠にありがとうございます。私からは、教育委員の皆様のご意見をまとめながら、自分の考えを述べさせていただきます。

図書館は、本や雑誌、視聴覚資料など図書館資料を読んだり、視聴したり、借りたりすることができる場であり、また、古文書や歴史公文書など、歴史的価値のある書物の管理等をしています。

小平市の図書館では、その他にも、事務局からの説明や資料にもございましたとおり、趣向を凝らしたおはなし会やぬいぐるみのおとまり会、学習室の設置、資料の展示会、一日図書館員の企画など、こども向け、大人向けの各種サービスも行っており、これらの評価は高いものと受け止めております。さらに、職場体験活動やインターンシップ等の学生の受け入れ先ともなっています。

先週は、花小金井図書館で行われた「スペシャルおはなし会」に参加してきました。用意されたマットの上に、数十人のこどもたちがぎっしり座って、話し手が語る物語に聞き入っていました。どの図書館も、おはなし会では、その日の演目が書かれたこうした手作りのカードがプレゼントされて、これは去年のもので、怖いお話のときなのでお化けがついていたりとか、真夏のこういうようなものだったり、先週はクリスマスということで、これをいただきました。サンタさんが袋に持ってきて配るのですが、本当にこどもたちが喜んで、これ手作りですが、ちょうど職場体験の中学生も手伝って作ったと言っていました。本当にこどもたちが大喜びでした。

また、毎日利用する市民もいるということで、一部の市民にとっての居場所にもなっています。こうした特徴を持った図書館は、小平市ならではの特徴を持つ貴重な公共施設であり、市民や児童・生徒にとって非常に大きな役割を担っていると認識しております。

一方で、近年のデジタル化の急激な進行による生活の多様化など、社会の変化に伴って、こどもの読書離れが進むとともに、図書館を利用する市民も減少傾向にあります。今後ペーパーレスの時代を迎える日も遠くないと考えると、図書館の在り方そのものが問われているのではないかと危惧しています。

そうした中で、先ほど述べました機能や役割を維持していくためには、これからの時代に合った図書館、市民に求められ、必要とされる図書館でなくてはなりません。

本年６月に小平市教育委員会が行った調査結果から、こどもたちの現状を少しご紹介したいと思います。

まず、小中高生を対象にした調査の回答です。「小平市立図書館をほとんど利用しない」と回答した児童・生徒は、小学生が約５６％、中学生が約８０％、高校生が約８８％で、その理由としては、「勉強や部活動、遊びなどで忙しい」が一番多くて、続いて「家にある本や書店・インターネットで購入して読む」が続いています。

次に、最近１か月に本を読んだと回答したのは、小学生・中学生がともに約８０％、高校生は約４７％と特に高校生の読書率が低い状況にあり、１か月に読んだ冊数は５年前の調査から小中高生ともに下がっています。

本の入手先については、小学生が「学校図書館で借りる」、中高生が、先ほど望月委員がおっしゃったように、「購入する」、との回答が多くなっていて、いずれも公立図書館で借りる機会は少ない状況です。このことからも、公立図書館を利用するこどもたちは少ないということが分かります。

一方で、未就学児に関する調査では、約８１％の親子が、週１回から月１回の割合で小平市立図書館を利用していると回答しています。

さらに、この調査の中で、「小平市の図書館、学校図書館に希望すること」という設問に自由記述欄がありまして、１，３００ほどあったのですが「特になし」を除いて、約７７０の記述を拝見しましたところ、次のような意見等が書かれていました。

本の種類に関する意見が大変多くて、漫画、小説、新刊本、面白い本、それからスポーツ・科学・動物・歴史・料理・防災など、回答者がそれぞれ希望する本を増やしてほしい、恐竜という意見もありました。その中でも、学習漫画を含む漫画や小説、新刊本などについての要望が多かったです。本の性質に関する意見も少なくなく、大きな字で書かれているもの、読みやすい本、やさしい日本語で書かれているものなどの意見がありました。

それから、図書館の機能に関する意見も非常に多く、本の場所を探しやすい機能が欲しいという意見、読みたい本やおすすめの本を相談したいという意見などでした。この二つは自由記述に結構多くありました。それからもう一つは、学校への貸出を多くしてほしいというもの。公立図書館には行かないけれど学校図書館で借りたいということなのでしょうか。それから、ビブリオバトルなどのイベントを増やしてほしいという意見も多数ありました。確かに私もつい最近思ったのですが、１００円ショップなどに行った際に、たくさん、何万という商品がある中で、自分が例えば石鹸を買いに行こうと思ってもどこにあるかが分からない。上に表示があってもなかなか分からないので、ついお店の人に聞いてしまうという経験は皆さんも少なからずあると思います。目当ての本がなかなか見つからないという意見が多かったので、本を探す機能という意見には共感すると思いました。

さらに、図書館の施設設備に関する意見では、学習スペース、話しながら本を読んだり、相談しながら調べ学習ができるスペース、もちろん静かにとか集中したいという意見も、少なかったですがありました。パソコンやＷｉ－Ｆｉを使えるスペースが欲しいなどの意見や、座席を増やしてほしいという意見もありました。

アンケート調査では、数値には表れない、こうした記述の分析も必要ではないかと思います。利用が少なく、今後は増やしていきたい小中高校生の声を生かしていく必要があると思います。先ほど川辺委員もおっしゃっていたようなワークショップ、今後新しくしていくときに、ワーク

ショップなども有効なのではないかと思いました。

最後にまとめとして、これからの図書館の在り方についてお話しします。

コロナ禍を経て人間関係が希薄になり、そして今後ますますデジタル化など社会の変化が進む中で、それが加速するのではないかと懸念されています。地域の中で人と人とが触れ合える場所としての公共施設が必要なのではないかと考えます。時代に合わせて変えるべきものと、時代が変わっても変わらないものがあると思います。

これから求められる図書館とはどのようなものなのでしょうか。具体的な考えを少しお話ししたいと思います。

公立図書館でしか見られない読めない蔵書がある場所、これは今もそうだと思います。本を読んだり、学んだりする、居場所としての図書館、こどもや高齢者、外国人の利用者、やさしい日本語と書いてあったのでこういう方もいらっしゃるのかなと思います。あるいは障がいのある方などが本を探しやすい機能的でユニバーサルデザインを意識した図書館、お話ししたり、相談したり、人とかかわりあえる場所、趣味を広げたり、イベントに参加したりできる楽しい場所としての図書館、などと考えました。

もう少しイメージをお伝えしますと、研究書など専門書も多くあるので、デジタル化されたとしても、研究書等を活用しながらグループでディスカッションなどができる研究の拠点としての場というようなことも考えられるかと思います。本や絵本にちなんだ写真展や絵画展、それから小平ゆかりの作家や人物、著名な作家の企画展など、人が集まる展示の場としても考えられます。

私の経験を一つだけエピソードとしてお話ししますと、私は中学校の教員として何年か図書委員会の指導を担当しているときに、近隣に手塚治虫さんの住居があったことから、生徒の活動として、手塚治虫展を開催したところ、たくさんの生徒や近隣の市民にご来場いただきまして、整理券を配るくらいになってしまいました。それをきっかけにして、漫画の蔵書、手塚治虫の人気漫画「ブラックジャック」とか「火の鳥」とかそういうものを図書館に取り入れたり、ときにはスライド上映したりいたしました。

それから、親がこどもに読み聞かせることができる部屋、パソコンなど機械を使って、機器を使って学習できる部屋がある子育てや学びの場などと、具体的に考えてみました。

さらに、学校図書館で公立図書館の蔵書を閲覧できるなど、今後ＤＸによる書籍のオンライン配信などの活用も将来的には有効なのではないかと思います。

事務局から紹介された多摩市立中央図書館に私も行ってまいりました。カフェなどもあって、「ちょっと入ってみようかな」と思えるような施設だと思いました。

これから先、年々、日に日に、科学が進展し、社会や人の生活様式が変わっていく中で、図書や施設設備などの図書館に関する市民の要望など、どのような図書館が望まれているのか、市民の思いを受けとめながら、公立図書館が活気のある施設になることを期待したいと思います。

本日は、市長におかれましては、会議を開催していただきまして、誠にありがとうございました。この会議を通して市長と教育委員会が協議・意見交換を行うことで、さらなる理解を深め合うことができたかと思います。私自身も図書館について改めて調べたり、考える機会となりました。これからも教育に関する事業が積極的に推進できますように今後とも頑張ります。今後ともご支援のほど、よろしくお願いしたいと思います。以上でございます。

○小林市長

まとめていただいてありがとうございます。

川辺委員もおっしゃっていましたが、イベントというところも一つまた切り口になるかもしれ

ません。アンテナショップとかコンサートというご提案をいただきましたが、やはり何かイベントをやると図書館に行ってみたくなると、聞きたくなるという思いも育つのかなと思ったところでございます。

改めまして本日の協議で、図書館の将来像に対する教育委員の皆様のお考えや想いをお披歴いただきまして、私も共感する部分が多々ございました。ありがとうございました。

これから小川西町図書館が新たに整備されますが、私といたしましても、時代に合った新しい図書館の形や在り方について、教育委員の皆様と一緒に引き続き考えていく必要があると思っております。

（閉会）

○小林市長

それでは本日の議題は以上となります。

今年度の総合教育会議はこれで終了となりますが、来年度の総合教育会議も、今年度と同様の回数の開催を予定しておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。それでは、本日の会議はこれで閉会いたします。